

東アフリカにおける南アジア系移民

関谷 雄一

<要旨>

有史以来、インド洋を舞台とした海上交易は発達してきた。インド系の商人たちもかなり古い時代から東アフリカに出入りしていたことが分かっている。ザンジバル島に最初にインドの交易商人たちが住みつくようになったのは19世紀末になってからであった。本論では、入手可能な文献に基づいて、主として19世紀末以降の東アフリカにおける南アジア系移民の歴史と、経済交易を中心とする彼らの生業、アフリカ社会への適応過程、そして現在の彼らの社会文化的特徴や考え方について考察した。さまざまな先行研究により示唆されているインド系移民たちの経済活力そして適応力の高さは、グローバル化した今日の世界において、ボーダーレスな経済活動をしながらコスモポリタンとしての生き方を余儀なくされている私たち地球市民の良きモデルとして考えることができる。また彼らの社会的適応力の高さは、自らの文化や社会のアイデンティティを、現状に合わせ異種混交化させながら強化している積極的な姿勢としてみなすことができる。インド系を中心とする南アジア系東アフリカ移民たちの史の変遷を紹介しながら、特定個人のライフストーリーや、先行研究にふれられていた移民たちに対するインタビュー調査の内容そして社会学的調査結果にも言及しつつ、彼らの現状を含めた文化歴史的概要を述べる。

キーワード：東アフリカ 南アジア系移民、ヒンズー教、グジャラート

Keywords : East Africa, South Asia Emigrants, Hinduism, Gujarat

はじめに

スワヒリ語で、「ハランベー (harambee)」とは、「みんなでお互いに支え合おう」という意味で使われ、特にケニアでは初代大統領ジョモ・ケニヤッタ (Jomo Kenyatta) が新興独立国ケニアを率いていく際に、国民意識の高揚と国家の隆盛を願いながらその言葉を国家的な標語としたこともあり、人々に親しまれた。よく知られる一説によれば、「ハランベー」という掛け声は、英領東アフリカ時代に、ウガンダ鉄道の建設に携わったインド出身のヒンドゥー系年季契約労働者が、猛暑の中で重いレールと枕木を運んで行く際に、お互いが倒れないように、ヒンドゥー教の聖母アンベー・マータ (Ambee Mata) をたたえる言葉「ハラ、ハラ、アンベー (聖なるアンベーよ、誉れあれ)」を掛け合ったことに由来している。ケニヤッタ大統領も、国民に団結を呼びかけるときにこのエピソードを引き合いに出したと言われる。

「ハランベ」は今もケニア社会で、相互扶助や団結を意味する重要な標語として人々に浸透している。社会開発や経済活性化を促すうえで、タンザニアの「ウジャマ（ujamaa）」やザンビアの「人間主義（humanism）」などと並びケニアの国家的な重要概念として社会の中に根をおろしているのである。インド系移民たちが残した掛け声が、アフリカに根をおろし、地元の人々の重要な社会的概念として定着しているその事実は興味深い。同様に、実際のインド系移民たちも、時代の流れとともに、本国とのきずなの希薄化、植民地政府による差別的待遇、アフリカ独立運動における共闘、新興アフリカ国家による追放政策そしてアフリカ現地社会からの排斥など、数々の苦難を乗り越えながら、東アフリカ経済にとり、不可欠の存在意義を確立してきた。東アフリカにおけるインド系を中心とする南アジア系移民たちはまさに「ハランベ」という言葉を具現化する歴史を歩んできた。

有史以来、インド洋を舞台とした海上交易は発達してきた。インド系の商人たちもかなり古い時代から東アフリカに出入りしていたことが分かっている。ザンジバル島に最初にインドの交易商人たちが住みつくようになったのは19世紀末になってからであった。本論では、入手可能な文献に基づいて、主として19世紀末以降の東アフリカにおける南アジア系移民の歴史と、経済交易を中心とする彼らの生業、アフリカ社会への適応過程、そして現在の彼らの社会文化的特徴や考え方について考察した。

さまざまな先行研究により示唆されているインド系移民たちの経済活力そして適応力の高さは、グローバル化した今日の世界において、ボーダーレスな経済活動をしながらコスモポリタンとしての生き方を余儀なくされている私たち地球市民の良きモデルとして考えることができる。また彼らの社会的適応力の高さは、かならずしも彼らが出身地との文化や社会のきずなを安易に忘却のかなたに追いやっていることを意味しているのではなく、自らの文化や社会のアイデンティティを、現状に合わせ異種混交化させながら強化している積極的な姿勢としてみなすことができる。

以下、インド系を中心とする南アジア系東アフリカ移民たちの史的変遷を紹介しながら、特定個人のライフヒストリーや、先行研究にふれられていた移民たちに対するインタビュー調査の内容そして社会学的調査結果にも言及しつつ、彼らの概要を少しずつ明らかにしていくこととする。

1. 東アフリカへの移民と移住

19世紀のインド洋を挟んだ南アジアと東アフリカとの貿易は、モンスーンの周期により支配されていた。11月から翌年の3月まで、ダウ（dhow）と呼ばれる、この地域を往復していた典型的な帆船（図1）が西インドから東アフリカへ航行し、4月から10月まで、帆船は帰路についていた。綿織物、象牙そして香辛料といった交易品による収益性は大きかったものの、多くの危険を伴った。多くの交易商人たちは安全に帰ることができなかった。荒

海、海賊、そして幾多の疫病が初期のころの交易商人たちの命を奪っていったのである。

19世紀末になり、ようやくインドの交易商人たちの一部がザンジバル（タンザニアの港湾都市）をはじめ東アフリカ海岸部（図2）にすみつくようになったのである。これら初期のインド系移住民たちは、今日東アフリカ経済界で活躍する南アジア系財閥の始祖であるとされている。これらの初期の移民のほとんどは、もともと属していた出身地の家業としてのビジネスや、共同体のビジネスに参加することを勧められており、期待もされていた。当初、彼らはインドと東アフリカを行ったり来たりしていたことも確かである。しかし、徐々に東アフリカに腰を据えるようになり、兄弟姉妹、妻子を呼び寄せて暮らすようになっていった。

東アフリカのアジア系移民の歴史の概要は、多くの文献がそれを伝えている。東アフリカがまだヨーロッパ人により発見されるはるか昔に、ザンジバルや東アフリカ海岸部はアラブ人や南アジア系の商人たちにより、商売の地としてよく知られていた。この交易関係は、東アフリカに大英帝国が植民地を築くころに強化されていった。1880年から1920年の期間に東アフリカの南アジア系人口は6,000人から54,000人に上昇したといわれる。これらの人々の中には、ヒンドゥー教徒（パテル、ロハーナーそしてシャーといった民族集団はこれに属する）、ムスリム（イスナーシェリー、ポーホラ、イスマーイリー）、ジャイナ教徒、シク教徒、その他がいる。

19世紀末に登場したさまざまなアジア系ビジネス共同体は、出身地インドで行っていた



図1 タンザニア沖を航行するダウ
(Wikipedia)



図2 東アフリカ海岸部 主として濃い部分
(Wikipedia)

よりもより緊密な社会・経済的関係を築き上げていった。この関係が、結果的に新たなビジネス戦略、婚姻制度そして資本集中の様式を確立していった。彼らはグジャラティ語を共有するようになり、実際に東アフリカにおける人口の2%を超えることはなかったという、彼らのマイノリティとしての社会的位置づけが彼らの経済活動にとり重要な役割を果たした。しかし、彼らの内輪での社会経済的結びつきは強まったものの、カーストを超えた結婚やヒンドゥー教徒とムスリムの結婚は、あまり一般的ではなかった¹。

ムスリムたちがヒンドゥー教徒たちよりも少し早く移住をし始めたのは、移住に関するヒンドゥー教徒のタブーが原因であるという。ヒンドゥー教徒でも上層カーストに所属する男性たちは、アフリカが女性たちにとり異国でしかも安全ではない、と考えていた。それゆえ、女性たちはインドの大家族に住まわせるほうがよいという考え方が一般的であった。東アフリカにおける経済的、社会的不安定性のため、ほとんどのヒンドゥー教徒の女性たちは、インドにとどまり義父母や子どもたちの面倒をみたり財産管理を担ったりしていた。彼女たちは子どもに教育を施す役割も任されていた。ヒンドゥー教徒の未婚男性たちは、一般的には仕事が終わるとインドに戻り結婚し、その後は男性だけが東アフリカと本国を行ったり来たりする生活を続けていた。その他、女性たちが東アフリカ海岸に数年暮らし、子どもを産むためにいったんインドに戻り10から20年の間、子どもが成長するまでは居続ける、といった生活をする夫婦もいた。

ザンジバルのスルタン（権力者）サイード・バルガシュ（Seyyid Bargash）は、この現状について既に知っていたに違いない。というのも彼はヒンドゥーの人々にも妻子を連れてくるように命じていたからである（図3参照）。1880年代初頭、彼はわざわざ船を出し、最初のヒンドゥー教徒の女性を連れてきたことが記録に残っている。彼は彼女に当時のお金で250シリングを支払い歓迎したという。また、彼は善意でザンジバルの旧市街を商人たちの妻子の居住区とし、それぞれの部屋に銀の給水栓を付けた水道管を引き、ヒンドゥー教徒の女性たちが表に出てこなくても生活できるようにすると誓った。こうした出来事は、まさにグジャラートのヒンドゥー教徒コミュニティが長年彼らの商業活動と交易を邪魔してきたブラミン司祭と宗教的慣習に抵抗をして成功をおさめた時期に起こったのである。これらの歴史的事件が、19世紀末から20世紀初頭にかけて、ヒンドゥー教徒の移民と移住者たちに活路を与



図3 ザンジバル島 スルタン宮殿
(Wikipedia)

えた。新しい世界（実際には過去のことはあるが）が、開かれようとしていたのである。

2. 1880年から1920年までの南アジア系移住民の暮らし

オオクの聞き取り調査によるインド系移民のライフヒストリーを紹介しながら、移民たちの歴史を見ていきたい（Oonk 2004a, 2004b）。スンデルジブハイ（Sunderjibhai）の移民経緯は、ヒンドゥー系ロハナーの人々の東アフリカへの移民史の典型的な歩みを踏襲している。1916年、彼が10歳のときにザンジバルに父親、ナンジブハイ・ダモルダル（Nanjibhai Damordar）と一緒にやってきた。彼らは親戚、ケサウジ・デワンジ（Keshavji Dewanji）の息子たちが継ぐのが嫌でインドに帰ってしまったせいで放棄されそうになった店を継ぐことになった。だいふ手前で、ナンジブハイの妹のひとはウガンダにいたロハナーの人と結婚していた。彼はお金になる交易ならなんでもした。

20世紀の初め、南アジア人たちが交易をしていた品々には、織物や着物、象牙、金、そしてトウモロコシ、豆、穀物といった食料もあった。織物と着物は、インドから輸入され、象牙や金は輸出された。ほとんどの食料商品は地元で取引された。加えて、裕福な家族は銀行経営に乗り出すようになった。ほとんどの商品は海岸部から奥に向かって交易をしに行くインド系やアラブ系の商人たちに90-120日間、年利6-9%の費用貸付の形態で買い取られた。このように、交易商人たちの儲けには商売の純益と前払いが含まれていた。いくつかの大財閥はフンディ（Hundi）¹¹をボンベイ、ザンジバル、マスカットそしてダルエスサラームで交換していた、これらの現象はこの地域での金融業の実質的な始まりであるとされている。ケシャブジ・アナンディ（Keshavji Anandi, 99歳、ヒンドゥー系ロハナー）はアナンディ家の老人であるが下記のように回想している。

私の祖父は、ボンベイ、ポルバンダールそしてマスカットにあらゆる取引先を持っていた。ポルバンダールには、さらに祖父を助けるインド系の人々もいた。同様に、ボンベイにも彼の義理の兄弟が住んでおり、そこにおける家業を守っていた。いま、だれかたとえばダルエスサラームでフンディを儲けた場合、ボンベイやポルバンダールに行って、そこでお金を受け取ることもできた。家族の信用がある限り私たちはお金のやりくりをすることができた。それは長い事続き、交易活動の傍らで、金融業により莫大なお金を儲けることができた。

最も重要なのは、こうした家業が親族により世界中の様々な都市で展開されていたことである。これらのネットワークは、共同体の盛んな交流と婚姻関係により支えられていた。ある家族は東アフリカに移り住み、他の家族はインドに残り、インド側の商売をし、土地や建物などの財産を築いた。家族と共同体の関係は、家長に、家業の概要を把握させ

るために遣わされた交易商人や通信役の年1回の往復の働きによって強化された。しかし、妻を連れて東アフリカに移住したヒンドゥー系ロハーナーの人々にとり、もはやインドにもう一度旅をすることはとても気乗りのしないことであった。

当時、「本当にそれが必要な時」にインドに戻る移民もいた。たとえば、結婚式や葬式への出席や家族が危篤状態になった時などである。オオクによれば、年寄りのインフォーマントでさえも、父親や祖父たちがインドに戻ることなどめったになかったことを証言している。花嫁探しや、病気を治すことや、引退して穏やかな暮らしを求めて戻ることあるいは、遺灰となってガンジス川に播いてもらうことを除いては戻らなかったそうである。ヒンドゥー系移民の年寄り思い出したように証言することには「めったに戻らなかったが、本国とは商売の上では良い関係が続いていた」そうである。このことは、南アジアと東アフリカを結んでいた、典型的なインド系家族のネットワークの在り方を証言している。このネットワークにおいて中心的な役割を果たしていたのは家族の最年長の者かその兄弟たちであった。商売は地理的に離れたところに分散し、それゆえお互いに離れていた。しかし、商売の利益そのものは家族のものとなり、家族の男性たちに平等に分配されていたことが分かる。

故郷から遠く離れて、東アフリカに移り住んだインド系の人々の家族構造は、拡大家族から変化して核家族化していった。なぜならば、海を越えた交易商売の展開は、人々に一つ屋根の下で暮らすことを困難にしていったからである。それゆえ、伝統的な商売関係構造、つまり収益を男性の家族構成員の間で平等に分けていく仕組みも変わらざるを得なくなった。そもそも理想的とされた、拡大父系家族は東アフリカの「ヒンドゥー法」では支持されていない。グジャラートで適用されているヒンドゥー法ミサクシャラ派において、家族の中で男系によりたどることのできるすべての男性たちは、家業においても平等に分け隔てない取り分を分配されて、多くはその最年長の男性によって率いられるとされる。東アフリカにおいて、唯一財産が差異のあるかたちで分配されるのは、もともと法的に分配方針を取り決めたパートナーシップや会社経営の形の場合のみである。結果的に、商売の家族的「分配」は、兄弟間、父子間でインド様式が残されたが、より個人的な所有権をベースにした家業形態に移行を余儀なくされた。古いパターンを破り、東アフリカのインド系移民たちは彼ら独自のやり方で商売をし始めたのであった。

このように経済活動の様式は変化していったが、社会的行動様式は昔ながらの慣れ親しんだ様式が残っていった。商売に成功したロハーナーの家族の人々は、典型的な「拡大家族」用の家屋を建てて、インドの文化をできるだけ忠実に再現しようとしていた動きが見出せる。これらの家屋は、拡大家族が住めるように建設されたが、ほとんどのインド系の人々は東アフリカ全体に散在し、より多くの核家族を形成していった。このような避けられない社会的変化があったにもかかわらず、最初に東アフリカに移住したグジャラートのパイオニア的存在の南アジア系移民は、出来るだけ彼らの「グジャラート文化」を再生産しようとしていたのである。スデルジブハイの場合、モンバサに建設した典型的な拡大

家族用の家屋がそれを物語っている。彼の家の中には広い応接間、植民地風の家具、伝統的グジャラート式の揺り椅子（これは東アフリカの多くのグジャラート式家屋に見出すことのできるアイテムである）がある。彼の両親の写真は特別大きな空間に掲げられ、新鮮な花で飾られている。いくつかの伝統的アフリカ芸術品を除いては、その応接間に漂うのはグジャラートの雰囲気である。

応接間の隣には台所がある。家は典型的な1つ台所の家屋である。拡大家族は、一緒に寝泊まりし、食事と一緒にするのである。家の中にはたくさんの部屋があり、それぞれの部屋は一つひとつの家族の寝室を形成しているが、応接間と台所は家族全体が共有するようにできている。台所には台がない。というのも女性たちは床に座り、野菜を洗ったり、果物を切ったり、調理をしたりするのである。彼女たちはグジャラートのブラミン階級の女性に手伝われながら食事を用意する。台所の隣には食事をする部屋があり、大食卓を大勢が囲んで食事を共にするようになっている。食事部屋に入るときは靴を脱ぐことになっている。男性と女性は、分かれて食事をする。この家ではお酒や肉は食されない。この家族はグジャラートの伝統を守りベジタリアンで酒を飲まない生活を維持してきたのである。スデルジブハイはヒンドゥー系の衣装であるネール帽子、ドティという着物を着ることを誇りにしている。

東アフリカにおける移住民の増加と、グジャラート文化の再興のプロセスの中で、拡大家族の価値観は、重要な位置を占めていた。たとえば、スデルジブハイとその父親によるモンバサにおける商売が繁盛したのも、本業とは別に非公式な形で展開していた家業によるところが大きい。ザンジバルやインド本国における彼らの家族のネットワークを使用した商売だけではなく、植民地法も活用した活動を行っていた。1920年代、個人がブローカーと交易商人を兼ねることは禁じられていた。そこで、ナンジブハイはブローカーの免許を取得し、その息子のスデルジブハイは交易商人のライセンスを獲得した。このような形で1つの家族の中で、それぞれのサービスを顧客に提供することができるようになるのである。法的には、これらの会社は別々に登録された。

というわけで、インドで生まれ育った初代のインド系交易商人たちは、本国との強い経済的社会的きずなを維持していた。彼らはインドで伴侶を探し、彼らは商売の一部と財産を本国に残し、引退後はグジャラートに帰るか、ナンジブハイ・ダモルダルのように、東アフリカにとどまったとしてもインド様式的生活スタイルを再生産させようとしていた。東アフリカのインド系移住民はインドに戻ることはほとんどしなかったものの、彼らの故郷は彼らの重要な心の拠り所としてとどまった。彼らは人間関係において、インド伝来の文化的で慈悲深いきずなというものを必ずしも拡大家族に持ち込むことはなかったけれども、共同体のきずなにそのような要素を確立しようとしていたことは興味深い。核家族の家長は、彼らの社会的地位を事前により高めようと努力していた。東アフリカにおけるインド系移住民のパイオニアの中には、出身地の村に多くの献金を施す者もいた。アナンディ家は病院を建て、ダモルダル家は小さな学校と孤児院を建てた。よく知られているマ

ダバニ家とメータ家もグジャラートで類似の慈善事業を手掛けている。これらの事例が示すのはインドがこれら交易商人たちにとり、たとえ遠く離れてあまり訪れることもなくなった故郷だとしても文化的アイデンティティの基底となっていたことである。

3. ウガンダ鉄道とインド系移民：1884年から1920年代

東アフリカ分割の結果イギリスはザンジバルを含めた広大な領域を植民地として領有することとなった。しかし、ザンジバル対岸の大陸部はドイツ領にとどまったので、ザンジバル島がそれまでインド系東アフリカ交易商人たちの中継貿易地としての重要性はいっきょに低下することとなった。代わりにイギリス支配圏のモンバサが、貿易中心地となった。インド人商人たちだけでなく、イギリス植民地支配勢力もモンバサを拠点に内陸への進出を図ろうとした。イギリスが初めに着手したのが、鉄道建設であった。のちにウガンダ鉄道と呼ばれるようになる鉄道が目指したのはヴィクトリア湖畔のウガンダである。そこは、イギリスにとり、戦略上きわめて重要なナイル川の水源地域でもあった。鉄道建設のために、インドから「クーリー（苦力）」と呼ばれた季節契約労働者が導入された。

鉄道が内陸部へ延びるにつれ、こうした年季契約労働者とは別に、商業や農業を目的としたインド人や白人入植者が続々と移住した。やがて支配層としての白人、中間層としてのインド人、労働力として最下層に位置づけられたアフリカ人、というイギリス植民地に特有な人種別三層構造社会が東アフリカに展開することになる。

1) ウガンダ鉄道建設とインド人年季契約労働者

現在のケニアに相当する地域で、内陸のウガンダに向かう鉄道の建設計画が本格的に検討されるようになったのは、1895年の東アフリカ保護領成立によって、イギリス政府の直接統治が始まってからのことであった。そこでまず建設作業には、現地のアフリカ人ではなく、インドで徴募された年季契約労働者を充てることがきめられた。この点についてC. エリオット（東アフリカ保護領弁務官1901-04年）は、インド人労働者を導入すると、「旅費や特別の食事を支給するためのコストがかさむが、必要な労働力はこれ以外の手段では調達できなかった」と述べ(Eliot 1905: 215)、アフリカ人には職業訓練が必要だが、すでに鉄道網が整備されているインドから調達する労働者ならば、その経験を生かして即戦力になると説明した。この計画に沿って、1896年にインドの移民法が改定され、3年契約の年季労働者の徴募が開始された。徴募に応じたものの大半はインド北・西部のパンジャブ、シンド、ボンベイ各地方出身のムスリムで、現地での徴募業務では、カラーチーを拠点とする商人ジーヴァンジー（A. M. Jeevanjee, 1856-1939）が活躍した。このとき蒸気船やダウに乗って海を渡ってきた年季契約労働者の大半は、未熟練労働者であったが、なかにはすでにインドで鉄道の技師や運転士として経験を積んでいた者や、会計士、医師などの資格を持つ専門職の者も含まれていた。

ウガンダ鉄道は1899年にナイロビに、さらに1901年にヴィクトリア湖岸のキスムに達して第1期工事を完了し、海岸地域とウガンダをつなぐ役割を果たすことになった。1903年までに導入されたインド人年季契約労働者の総数は3万1,983人にのぼったが、そのすべてが契約期間満了後も東アフリカにとどまっていたわけではない。1万6,312人はインドに帰国し、6,454人は傷病を理由に送還され、さらに2,493人は東アフリカで死亡したため、残留者は総数の2割に相当する6,724人であった(Mangat 1969: 39)。この数字からみると残留者の割合は極めて低いようだが、ケニアと同様にインド人年季契約労働者を鉄道建設に導入したローデシアでの残留率を3倍以上も上回る数字なのである(Patel 1973/74: 3)。しかも、このうち約2,000人は白人上司の推薦を受けて駅長をはじめとする鉄道関係の仕事などに就いたが、残る約4,500人はあくまでも自主的にケニアに留まり、中級・下級官吏や職人、あるいは同じコミュニティのメンバーのつてを頼って商人となった。

2) ウガンダの「無冠の帝王」

ウガンダ鉄道建設によって内陸部の市場開拓の好機が訪れると、一旗揚げようという志に燃えた者が、すでにモンバサなどで商業や金融業に従事していた親族やコミュニティのつてを頼りに海を渡ってくるようになった。モンバサのインド系移住民の人口は1887年の約500人から96年の鉄道建設開始時の約6,000人に一気にふくれあがったが(Gregory 1993: 12)、その半数近くはこうした自由移民であった。インド系移民社会を政治的、社会的に率いた初期の指導者、A・M・ジーヴァンジーやアリディナ・ヴィスラム(Alidina Visram)もこのように自らの意思でやってきた自由移民であったという。

ヴィスラム(1863-1916)は、インド西部のカッチでシーア派イスラームのイスマエリーの家生まれ、10代前半という若さで単身ダウ船に乗り込みザンジバルに渡った。彼は、ザンジバル対岸のバガモヨに向かい、遠距離交易に成功していた同じイスマエリーのパー(S. H. Paroo)のもとで働くことにした。ここでバガモヨと内陸部を結ぶ既存の隊商路沿いの村や町に点在する雑貨店ドッカ(duka)の経営を学ぶかわら、ドイツ領東アフリカを横断し、タンガニーカ湖畔のウジジを超えてコンゴへ、またヴィクトリア湖畔のムワンザからウガンダのカンパラやジンジャにも足を延ばして象牙などを買い付けたという。パーの死後経営を引き継ぐと、1901年にウガンダ鉄道の完成によって可能性が開けたモンバサに拠点を移し、内陸に向かって伸びていく鉄道線路と競うようにして内陸部に向かっていった(Mangat 1969)。多くの者がヴィスラムの店で修業を積んだのち独立し、鉄道線路から遠く離れた村に雑貨店を開いて、ヴィスラムの商圈をさらに広げる役割を果たした。ひとりヴィスラムだけがパイオニア精神に富んでいたのではなく、当時のインド系商人ならばだれでも商売の可能性を求めて見知らぬ村に入り、トタン屋根の店を開いたのである。彼らは、白人の植民地官吏や入植者を相手にヨーロッパ製商品を買い、アフリカ人には石鹼や布、塩、砂糖、サンダル、ビーズなどを売って貨幣の流通を促す役割を果たした。また彼らは金融業者の役割も果たし、ヴィスラムなどは植民地政庁の資金繰

りを支えていたという。最盛期の彼の商圈はコンゴ、スーダン、エチオピアにまで及び、それは雑貨店のほか自転車などの輸入代理店や綿繰（綿の繊維を種子から分離する工程）、製糖、精油などの工場も含むものだった(Salvadori 1989:225)。

このように東アフリカ全域で活躍したヴィスラムであったが、特にウガンダでは広大な商圈を築き上げた「無冠の帝王」として、インド人だけではなく、白人やアフリカ人からも讃えられた。これは商業だけではなく、綿工業への貢献によるものであった。彼は綿花の栽培ばかりではなく、輸送や綿繰にも進出し、1912年には産地ウガンダの中心都市カンパラにインド系初の綿繰工場を建設した。彼の後に続いて、ヒンドゥー教徒のロハーナーに属するナーンジ・カーリダース・メータ (Nanji Kalidas Mehta) など多くのインド系実業家たちが、綿繰工業に参入した結果、24年の綿繰工場の総数164のうちインド系の経営の者が100以上を占めたという(Hollingsworth 1960:71)。また多くのインド系移民がアフリカ人生産者から綿花を買い付ける産地仲買人として綿産業に関わった。綿産業の発展により、インド系移民の人口は1911年に2,200人、1921年に5,000人、1931年に1万4,000人、1948年に3万5,000人と増加の一途を辿ったが、その背後にはドイツと対抗していたイギリスがウガンダのインド系移民を優遇したことも作用していた。ヴィスラムは、ウガンダでの綿産業の牽引役を果たし、さらに商業、金融、運輸などの各分野でウガンダ保護領の発展に寄与した。そして、もちろんウガンダのインド系社会形成の先鞭をつけたのである。

ヴィスラムが東アフリカのインド系移民から尊敬を集めたのは、このような商業や実業での成功のためだけではなく、彼は政治の分野ではコミュニティの代表としてインド系移民の地位向上を要求し、1906年にナイロビに設立されたインド人協会では代表としてインド人差別の撤廃を強く訴えた。しかも彼はインド系社会の利益を一方的に主張するのではなく、白人やアフリカ人との融和にも心をくだき、福祉や慈善活動の分野でも積極的に活躍した。たとえば、彼の寄付によって1903年にモンバサに開設された公立図書館は、東アフリカ初の人種を超えた文化施設となった。こうした彼の努力は、保護領政府や白人入植者、アフリカ人指導者からも認められ、インド人とほかの集団との架橋となった。彼が一代で築き上げた東アフリカ全域に及ぶ商圈は、「商圈帝国」と呼ばれるほどのものであったにもかかわらず、戦間期に打撃を受けたのち、1916年の彼の死後、またたく間に解体してしまった。しかしその偉業はモンバサのアリディナ・ヴィスラム高校に今も偲ぶことができる。同高校はヴィスラムの遺志をついで、人種、宗教に関わりなく向学心あふれるすべての学生に門戸を開いてきたのである。

3) ケニアのホワイト・ハイランドとインド系移民

1901年に弁務官に就任したエリオットは、東アフリカの恵まれた立地条件を宣伝し、白人入植者の誘致に努めた。まず、翌年ウガンダ保護領東部の冷涼な高原地域を併合すると、王領地条例 (Crown Land Ordinance) によって保護領内の先住民占有地 (native

reserve) 以外の土地をすべて王領地とし。売買価格・賃借料を廉価に設定した。この結果、主としてイギリスや南アフリカから多数の白人入植者が流入し、コーヒー、茶、サイザル麻などの商品作物の農業経営に乗り出した。一方、インド系移民は以前から白人入植者優遇策に異議を唱え、自分たちも農業経営に従事したいと望んでいたが、エリオットは白人の居住に適した土地へのインド系の入植には反対であった(Eliot 1966:179)。白人入植者も、南アフリカでの経験からインド系に敵意を抱く者が多く、インド系移民への土地の払い下げに声高に反対した。結局インド系移民の願いもむなしく、1906年に「ホワイト・ハイランド」(白人のための高地)が成立した。高度1,500~2,500mの肥沃で冷涼な地域の譲渡は白人入植者に限定され、アフリカ人やインド系移民などの非白人は排除されてしまった。さらに1915年には東アフリカ保護領王領地条例によって、白人が賃貸権をもつ土地を総督に無断で非白人に占有・経営させてはならないと定められた。こうして東アフリカ保護領は、南アフリカをモデルにした植民地として、少数の白人入植者が広大な土地を独占することになった。

一連の事態に対してインド人は、ナイロビやモンバサに拠点を置く政治組織を基盤としてイギリス政府やインド政庁に嘆願書を提出するなどの抗議行動などを行ったが、断固たる拒絶にあい、白人入植者との対立を深める結果となった。インド系移民に不利な土地政策はさらに進み、1918年には都市部でもインド系移民の土地所有・占有が厳しく規制され、衛生習慣の相違などを口実にインド系専用の商業・住宅地区を定める居住区域隔離が実施された。

当時の保護領高官は、インド系移住民がウガンダ鉄道建設に貢献しただけでなく、植民地行政の中級官吏層として欠くべからざる役割を果たし。商業の発展にも寄与していることは認めていた。けれども彼らは、ひとたびインド系移民に土地を開放すれば、数の上でも経済的にも白人入植者を圧倒してしまうと恐れていた。このため、インド系移民は土地所有・占有の道を断たれ、農業出身の者が大半を占めていたにもかかわらず、中級官吏、商人、金融業者、職人といった道を選ばざるを得なくなった。ただし、これはインド系移民の積極的な選択であったという意見もある。たとえば、農民出身であっても鉄道建設工事で習得した技術を活かそうとしたとか、商品作物栽培に参入して白人やアフリカ人と競合するよりも、無競争の分野での成功を目指したという見解である(Gregory 1993:238)。

4. 2つの世界大戦を経て独立期まで：1920年から1960年

第一次世界大戦後、ドイツ領東アフリカの統治をイギリスが引き継いだ結果、ケニア、ウガンダ、タンガニーカ、およびザンジバルを含む広大な領土が英領東アフリカとして誕生した。しかし、同じ英領とはいえ、直轄植民地はケニアだけであり、その他は保護領(ウガンダとザンジバル)および国際連盟の委任統治領(タンガニーカ)であった。この支配形態の違いが、それぞれの植民地政策に微妙な違いをもたらした。しかしそれ以上に

表1 東アフリカにおける白人とインド系移民の分布と変遷 (1921 & 1931)

		ウガンダ	ケニア	タンガニーカ	ザンジバル
白人	1921	300	9,700	2,400	300
	1931	2,000	16,800	8,200	300
インド系移民	1921	5,000	25,300	10,200	13,800
	1931	14,200	43,600	25,000	15,200

白人入植者とインド系移民の人口数の違いが、各国の植民地政策を左右した。こうして、英領東アフリカにおけるインド系移民の立場は、基本的に共通しながらも、それぞれ異なるものとなった。当然のことながら、「インド人問題」は、白人とインド系移民をもっとも多く抱えていたケニアに集中した。表1はケニア、タンガニーカ、ウガンダにおける白人とインド系移民のおおよその人口分布と変化を示したものである。

1) ケニアにおけるインド系移民の土地取得に関する問題

土地取得差別を巡る抗議運動の過程で、インド系移民は1907年に設置された立法評議会の議席獲得をめざした。この結果1910年に初のインド系立法評議会議員となった、A・M・ジーヴァンジーは、差別撤廃を求めて精力的に活動し、特に1912年に発表した『東アフリカのインド人からの訴え』と題する小冊子は、「インド人問題」に国際的な注目を集める役割を果たした。しかし白人入植者の抵抗の前に差別解消は進展しなかった。

1920年代以降のインド系移民の運動を牽引したのは、1915年にインドから渡来した M・A・デーサーイーであった。彼は『イースト・アフリカン・クロニクル』紙を刊行してペンを武器に闘った。また、東アフリカ全域のインド系移民指導者を糾合し、休暇中の東アフリカ・インド国民会議派を復興すると、本国のインド国民会議派との連携を模索し、さらにインド人だけでなく、アフリカ人活動家ハリー・ツクⁱⁱⁱとも連帯して、その民族闘争を支援した。

しかしこの時期のインド系移民の権利拡大を求める運動は、あくまでも大英帝国「臣民」として白人入植者と対等な地位を要求するもので、アフリカ人を視野に入れていなかった。このような弱点を内包したインド人の政治運動は、1930年代以降マーカン・シングが牽引していく労働組合運動、さらに独立をめざす運動の中で微妙な変化を遂げていく。

2) ザンジバルにおけるクローヴ生産とインド系商人

クローヴ（丁子ともよばれる香辛料）は、1818年頃、インド洋交易に携わっていたアラブ系商人によって原産地モルッカ諸島からザンジバル島にもたらされたとされている。原産地と同緯度に位置するザンジバルの気候条件や土質が適していたのであろう。クローヴはたちまちザンジバル島の輸出農産物として注目を浴び、アラブ系商人は交易からの利潤

を、競ってクローヴ農園に投資した。やがて奴隷貿易が禁止され、象牙の資源も枯渇し始める。これに追い討ちをかけるように、対岸の大陸部がドイツ領となり、ザンジバル島は、交易の中継地としての役割を終えることになった。1890年、ザンジバルを支配下に置いたイギリスが直面したのは、全面的にクローヴ産業に依存したザンジバル経済だったのである。そこでは、アラブ系クローヴ生産者、インド系仲買人兼金融業者、そしてアフリカ人労働者という人種的に組織されたモノカルチャー経済構造が形成されていた。イギリスはインド系移民に農園や資本が傾倒しないよう様々な規制を定めたが、それに対するインド系移民たちの反発も強く、1937年にはインド系輸出業者によるクローヴ輸出ボイコットが起きた。

3) アフリカ民族運動とインド系移民

両大戦間期のインド系移民の問題は、土地（ケニア）、綿業（ウガンダ）、クローヴ（ザンジバル）といった植民地の資源をめぐる人種間の争いとして展開したとされる。その後は、これに、アフリカ民族運動の進展というきわめて政治的な要因が加わることになる。その背景には、農業部門や非農業部門で力を伸ばしてきたアフリカ人が植民地的経済構造に不満を抱き始めたという状況があった。アフリカ人の不満は、①登録証（キパンデ）の携行義務を含む労働政策、②土地の収奪などの経済政策、③政治的な人種差別政策の3点に絞ることができる。このうち、②と③は、アフリカ人同様、ホワイト・ハイランドなどで土地所有を禁じられ、立法評議会で白人と同等の権利を与えられていなかったインド系移民社会が抱いていた不満でもあった。この他、インド系社会は、植民地行政府が打ち出す移民制限法にいかに対抗するかという移民特有の問題を抱えていた。こうした不満の共有が、インド系移民とアフリカ人の共闘路線に基盤を提供したのである。ケニアでは労働組合運動、協同組合運動、そして1950年以降は政治運動を通してインド系移民とアフリカ人との共闘が見られた。表2は1950年代の白人とインド系移民の人口分布概要である。

表2 1950年頃の東アフリカにおける白人とインド系移民の分布

		ウガンダ	ケニア	タンガニーカ	ザンジバル
白人	1950	10,000	50,000	20,000	500
インド系移民	1950	73,000	150,000	80,000	18,000

5. インド移民社会の現状：1960年から現在

1) 東アフリカ諸国の独立と国籍問題

1961年のタンガニーカを皮切りに、1962年にウガンダが、1963年にはザンジバルとケニアが相次いで独立を達成した。その後、タンガニーカとザンジバルは1964年4月に連合し、10月にはタンザニア連合共和国へと移行した。新興東アフリカ3国のインド人がまず

直面したのは、国籍問題である。彼らは、2年以内にアフリカ諸国の国籍か、イギリス国籍か、インドまたはパキスタン国籍のいずれかを選択することになったからである。ただし、両親の一方が現地で生まれ、かつ本人が現地生まれのインド人は、自動的にアフリカ諸国の国籍を与えられた。1970年頃の推計によれば、ケニアで61%（14万人中8万5,000人）、ウガンダで38%（8万人中3万人）、タンザニアでは80%（10万人中8万人）がアフリカ諸国の国籍を取得したといわれる（Tilbe 1972：8）。この数値は、東アフリカ3国のインド人の意識や、それぞれの植民地下で展開したインド系移民とアフリカ人との関係を象徴的に示している。この数値はアフリカ人側から見たときには、インド系移民の「国家への忠誠度」を示す指標となり、インド系移民自身にとっては「踏み絵」だったとする見方もある（富永&宇佐美 2000）。インド系移民にとりさらに皮肉なことは、アフリカ諸国の国籍を取得しようとしまいと、新興アフリカ諸国の採った政策は、アフリカ人優遇政策の展開であり、インド系移民にとり決して良い時代が到来したわけではなかった。

2) 東アフリカ各国のインド系移民排斥政策

ケニアではアフリカ人優遇政策が徐々にとられるようになり、ウガンダでもイディ・アミン大統領が1972年に突然インド系移民を90日以内に追放すると宣言した。その後国外退去の最終期限までに、約5万人のインド系移民がウガンダを離れた。2万7,000人がイギリスに、1万人がインドに、6,000人がカナダに、4,000人が西欧諸国の難民キャンプ、それ以外に数千人がそれぞれアメリカ、パキスタン、ケニア、マラウイに保護を求めた。ウガンダ国籍を持っていたインド系移民は追放をまぬかれたものの、さまざまな制限を加えられ国外退去を余儀なくされる者も出てきた。タンザニアでは1971年4月に公布された借家没収法（Acquisition of Building Act）が、インド系移民による投機的な不動産売買を阻止するために導入されたが、ダルエスサラームに集住していたインド系移民を中心に、国内のインド系移民社会に壊滅的な打撃を与えた。

3) インド系移民に見られるようになった、結婚様式の変化

1920年以降、インド系移民の第2世代の人々の間で2つの大きな変化が見られた。男性たちが結婚相手としてインドのロハーナー出身の女性よりは、東アフリカに生まれ育ったヒンドゥー系の女性を好むようになったこと。そしてその結果、カースト制の壁を破る形で、相手を探す（パテール、シャー中心）ことが多くなった。ヒンドゥー系の社会がかようにも、カースト制を打ち破る形で婚姻を許容するようになった背景には、同社会がより東アフリカ起源の基底を築きつつあったということである。もっと細かく言うのであれば、東アフリカのインド系移民を基底とする社会を築きはじめたのである。しかし当初は本国のロハーナーの女性に対する需要は高かった。というのも、東アフリカにおいてヒンドゥー系の男性人口は女性の倍だったことが背景として考えられる。

2番目の大きな変化は、インド本国が東アフリカのインド系移住民の商売にとりさほど

重要ではなくなってきたということである。彼らはむしろ、東アフリカ地域、イギリスそして日本などを商売の相手先地域として捉えるようになっていった。インドはこの時代、織物産業で日本やヨーロッパにさえも追い抜かれていったのであった。東アフリカにおいて、インド産の織物は市場のシェアを縮小し、消費市場としての重要性も無くなったのである。これらの背景には、2つの経済的变化が見られた。一つはインドが近代産業国家として出発することに機を逸し、もう一つは、むしろ東アフリカが産業化を遂げてしまったことであった。東アフリカの産業化においてインド系移住民たちが重要な役割を果たしたことは言うまでもない。東アフリカが、独自の織物を産出しようとしていたのである。

この時期、より多くのアジア系東アフリカ住民が、「インド式学校」に通うようになっていった。「インド式学校」では、小学校高学年までグジャラート語が教育され、そののち英語教育に切り替えるシステムを導入していた。それゆえ、アジア系東アフリカ住民たちの多くがグジャラート語と英語を流暢に使えるようになった。彼らにとって、そのあとイギリスで高等教育を受けることはまだ至難の技であった。それでもわずかながらもイギリスの単科大学や総合大学に通う者も出始めた。このことは、彼らが英語とヨーロッパ文化に通じるようになり、外観や宗教は「インド的」なままであったことを意味している。究極的にこの西洋へのまなざしはインド系商人たちの商売傾向にもあらわれるようになった。

オオソクの聞き取り調査に戻ってみる (Oonk 2004b)。ブハラートはヒンドゥー系ロハナー出身の典型的な男性で、ロハナー共同体の中では結婚しなかった。彼は、ダルエスサラームで生まれ、イギリスで教育を受けた。そののちパテル出身の女性と出会い、彼女にプロポーズをした。彼は家族の中でも最初にロハナー出身者以外の女性と結婚しようとする男性であった。彼は周囲の者たちに結婚相手は「現地で生まれ育ったインド系の女性」が、東アフリカの生活様式に対する知識と経験が豊富なので、より良いと説明をした。この生活様式の知見の中には現地の流れに合わせた「ゆっくりとした生き方」も含まれ、スワヒリ語の知識やアフリカの召使に対する態度、当時東アフリカ流に変化始めてはいたが、いわゆるグジャラート風の食事を作ることもそれに当てはまる。東アフリカ流のグジャラート料理とは、香辛料の効き目は薄めで、よりまろやかな味付けで、時々ココナツミルクを混ぜ、インドのバター、ギーはあまり使われなくなったものをさす。ブハラートにとっては、嫁探しをロハナー共同体の外ではあっても東アフリカ圏内するほうが、インド本国の同じロハナーで「アフリカのことを何も知らない人」を求めるよりも賢明だと思われたのであった。

それにも関わらず、若い男性にとり自分のカーストの壁を越えたところの女性と結婚することを父親に了承させることは容易いことではなかった。ブハラートは以下のように説明している。

自分の父親を説得するのに1年がかかった。しかし私は父がそのことに極めて冷静に

対応していたと思う。彼はもちろん私がナンジ・ダモダール家の男系の中でその伝統を破る初めての人間であると言った。私はインド系は等しくインド系の人間だと言った。兄弟間でも私のすることに反発する者はいたことも確かである。彼らは父よりも保守的だった。父親はそれに比してより開けた思考の持ち主で、きちんと説明したらインド系でなくてもムスリムとでも結婚してよいという考え方であった。実際、私の末の弟はムスリム系の女性と結婚している。父親はそれを許したのである。

私がどうやって父親を説得したかという、私が彼女と結婚してはいけない理由を、伝統的な慣習を破ること以外に1つでもあげて下さい、と頼んだのである。もし私が2人目のインド系女性と結婚しようとしたのであったら反対される理由は理解できる。しかし、1人目である相手と結婚したところで、宗教も伝統も変わることはない。2人ともグジャラートでもあった。もし異なる宗教、異なる人種の女性と結婚するのであったら、その子どもに何が起こるかを考えると父親の反対も納得し受け入れたのだが、事実はそうではなかった。しかし、彼はその理由を挙げるができなかった。彼は認めはしなかったものの私の意図はつかめたと思った。そこに行きつくまでは、実にさまざまな議論をしたのであった。

ブハラートの証言はともかく、実際には彼の子どもにはあることが起こった。彼の2人の娘たちは自分たち自身をロハーナーだとは思っておらず（パテールの女性から生まれたので）、ヒンドゥー系だという認識を持っている。ブハラートの兄たちは、保守的な考え方を変えなかった。幾人かは、自分の子どもを同じカーストのものと結婚させたがった。ブハラートが言うには、「それでも、彼らの子どもたちは私が直面したのと同じような反対にあうことはないであろう。もしカーストが異なってもヒンドゥー系の女性であれば、それは受け入れうることになっているのである」ということである。

このようにして、インド系男性たちは徐々に東アフリカ出身のヒンドゥー系女性を結婚相手として選ぶようになっていった。カーストの壁を越えてもそうするようになったのである。そしてそうした選択の主たる理由として彼女たちが「東アフリカの文化」を知っているということがあげられるようになった。この東アフリカ出身の女性を結婚相手として選択する傾向は究極的にはインド本国との社会的家族的関係の希薄化につながっていった。インド本国は結婚相手を探す舞台として重要性を失っていったのである。この傾向は特に20世紀に入る前に東アフリカに移民としてきたインド系の住民の間で顕著であった。彼らはインド本国の家族とのきずなを失ってゆき、それゆえ家族の事情でインドを訪れることも無くなっていった。

インド本国との関係の希薄化はそれだけにとどまらなかった。インドから輸入されてくる商品の質に著しい変化が起きていたことも、パイオニア的存在のインド系家族の子孫たちが証言している。おおよそ第二次世界大戦の後、インドからの商品の質の低下が起きていたことを多くの者が指摘している。この質的衰退は1930年代から既に始まっていた。特

に織物製品にその変化が顕著に見られたという。カンガ、シャツ、サリーそして衣類の多くはインドから輸入されていたが、やがて日本製品が東アフリカ市場を占めるようになっていったのである。オオソクのインフォーマントたちの証言によれば、日本製品のほうが質も上で安価であったことを記憶していた。インドの製品よりも日本製品のほうが仕上がりが、染色もそして商品化も鮮やかに完成されていた。他にも指摘できることは、インド人たちが相変わらず「傲慢で頼りにならなかった」のに対し、日本人たちの製品の持ち込み方は「とても野心的」であった点である。

上述したケシャブジ・アナンディの会社は、インド製のポルバンダールの商品取引を1935年あたりにたたんでしまった。その時からインドとの商売を通じたきずなは途絶えた。ケシャブジ・アナンディ社はそれに代わって日本支社を開設したのである。以下は彼の子たちの話である。

モンバサで私たちはインド製の織物を1930年代の間扱っていた。1930年代末になり、ある男が会社に雇われた。彼は野心的で営業も上手であった。彼は、「あなた方の会社は良い会社だ。これからは日本製品を扱う方が良い。なぜ日本に支社を開設しないのか。私が代わりにそれを引き受けましょう。そして、日本から東アフリカにそれを輸入していきましょう。そのほうが市場のニーズにも応えることができるのです」と言った。やがてデヴァーニ社（Devani & Company）が日本に開設された。その男は日本で製品を買い付け東インドに向けて輸出し、モンバサとダルエスサラームで販売し始めた。デヴァーニ兄弟の会社はダルエスサラームにもあった。彼らも衣装を扱う商売をしていた。そうしてデヴァーニ家系列の会社は3社に増えた。一社はモンバサに、もう一社はダルエスサラームそして日本の3か所で日本製品を扱った貿易を始めるようになったのである。日本との取引は繁盛したものの会社は「敵性財産」として戦争中に閉店に追い込まれた。

インド系東アフリカの会社の多くは日本にゆき、日本人は少なくともモンバサとダルエスサラームに3つの会社を設立した。日本綿製品貿易会社、ワショー株式会社、トーキョー株式会社であった。

こうしたインド系東アフリカ社会と本国との経済的関係の希薄化が、インド系移民たちの東アフリカ出身者たち同士の結婚への傾倒による社会的関係の希薄化と、インド本国の経済的衰退により明らかとなったことを多くのインフォーマントたちが調査者に証言している。その他に挙げられる理由としては、正規銀行の登場であった。インド系東アフリカの人々はもはや、フンディ制度よりも人々は正規銀行のシステムを利用するようになったのである。言い方を変えると、本国インドに残っていた家族は東アフリカ移住民にとり経済的および社会的資源としての重要性を失っていったのである。

それにもかかわらず、統計上はこうしたインドとの取引の衰退は顕著には見出すことが

できない。反対に、調査者の一般的な印象によれば、インドは東アフリカの2番目に重要な輸出先としてイギリスに続いた。この事実直面した時、第2世代のインド系東アフリカ移民たちは、これらの貿易活動を支えていたのは、第二次世界大戦後に東アフリカに来るようになった「新たなインド系移民」たちの経済活動であると証言している。それゆえ、古い世代の移民たちは新しい世代の移民たちに自分たちの活動方針の正当性を訴える必要に迫られた。つまりは、インドやインド本国の人々に対する消極的な印象を植え付けることであった。

第2世代のインド系東アフリカ移民たちは、新しいベンチャービジネスを英国で展開し始めた。1947年のインド独立をきっかけに、インド政府はより適正な形で国民に対する政策を変換した。独立以前は海外のインド系移民たちはガンジーやその他のナショナリストたちが、植民地支配下で抵抗運動を継続させるために重要な役割を果たしていた。独立後ネルーやその他の国家元首によって進められた新しい政策は、「故意の無関心」とも呼ばれる性質をもつものであった。海外のインド系移民たちは、インド本国ではなく移り住んだ現地でのアイデンティティを持つように、勧められた。このようなインドの新たな政策方針と、インド系東アフリカ移民たちの新しい経済的天地としてイギリスに傾倒してゆく動きが、インド本国とインド系東アフリカ移民との経済的社会的関係の希薄化を増長させたことは確かである。

オオクによれば、東アフリカにおけるアジア系商人たちがインド本国あるいはインド商人に対してこの時期に新しい印象を抱くようになったことは驚くべきことではないらしい。ほとんど例外なしに、インフォーマントたちはインドについては消極的な印象を抱いており、その当時のアジア系東アフリカ移民たちがインド本国とのかかわりを何らかの正当な理由で切り上げようとしていたことも証言している。彼らはもはや引退後本国に戻ったりそこで暮らしたりすることやインド出身の商人と取引することさえも欲していなかったのである。これらの似通った考え方を裏打ちする証言を以下に挙げてみる。

例えばあるヒンドゥー系インフォーマントは以下のように話した。

インドには正直さがもはやほとんど残っていない。彼らは人目を盗み、サンプルは素晴らしいものを見せておきながら、実際の商品は粗悪品をよこした。インドから届いた船便も開けてみると実際には契約よりも少ない量の商品しか入っていなかったりした。同時に、インドで東アフリカの産品を販売しようものなら、数え切れないほどの条件があってできない。結局は疲れ切ってしまうのである。こんなことは他国、例えば南アフリカ、イギリス、カナダそしてアメリカとは絶対に起こらない。インドとはもう交易をしない。不必要な苦勞で頭を悩ます必要もないだろう？

さらに同じインフォーマントは加えた。

私の両親や祖父母は、インドに家族を置いていた。だから、数少ないけど頼れる人が

いることも知っていた。しかし、今はどうだい。誰もいないんだよ。信用できる人はインドのどこにもいないのさ。

家族構造や結婚様式といった社会的基盤が、インドから東アフリカ中心に移るにつれ、東アフリカのグジャラート社会はインド本国のグジャラート社会とは異なっているという認識も強くなってきた。このことは、かつてまでまだインド本国から東アフリカに輸入されてくる産品が重要で、東アフリカ以外にも海外でインド系の人たちの拠点が活発に機能していたころと比べると対照的な考え方であった。

グジャラート地方を中心とする西インドの家族や共同体とのきずなが、希薄になった後でも一部のインド系アフリカ住民たちは、インド商人との取引を続けたが、何年もすると「何か」が変化したことに気づくようになった。インドのグジャラートは東アフリカのグジャラートとはもはや同質ではなく、全く異なるものになってしまったのである。

他のインフォーマントも以下のように証言している。

私は今はもう、インド本国のグジャラートよりは東アフリカのグジャラートとの商売のほうがやりやすい。とくに電話でお互いに話し合う時にそれを感じる。私は商談のときは決まって誰かの言質を必ず取るようにしている。10回のうち8回以上はこのやり方で問題は起きない。しかし、インドのグジャラートとの商談に関しては同じやり方をしても10回のうち8回は何らかの問題が生じる。たとえば、インド本国の人々やグジャラートの人々と商談をしていて、文書化されない、口頭の形のまま契約をやむを得ず結ぶと、大概は何か間違いが生じてしまうのである。東アフリカのグジャラートと同じような契約を結んだとしてもそれはあまり起こらない。そこには暗黙の信用関係があるとしか言いようがない。

ロハーナーの人々の多くは、東アフリカ出身のグジャラートはより文明化され、頼りになり、現代的生活になじんでいると認識している。実際に東アフリカのグジャラートは高い教育水準を東アフリカやイギリスで受けて保っている。彼らはインドのグジャラートよりはインド系東アフリカ移民の人々の方が透明性のある契約を結ぶことに成功している。もちろん、これには理由が他にもあり教育水準とは関係のない事だったとしても、そうした認識が強かった。しかし、実際にはオオクのインタビューを通して多くの者が教育水準の違いを指摘した。文明化されているかされていないか、という価値判断とともに引き合いに出された考え方である。

見てみる、実際には彼らは正しい話し方も身につけていないではないか。インド本国の彼らは、乱暴で粗野なんだ。私たちの親の世代が東アフリカにきたときには、イギリス人もそこにいた。イギリス人が私たちを教育したのである。おかげで私たちはどのよ

うに話し、どのように着るかをきちんと習っている。インド本国、とくに村ではそれが欠けているんだ。

このように教育や、「西洋式生活様式」との接触のほかに引き合いに出される考え方がある。インドには、激しい商売競争があり、インド商人たちはアフリカのインド系より厳しい競争の中での商売を強いられているという考え方である。彼らは商売に関してより素早く賢い。このような背景が、インド本国のインド商人たちとインド系の東アフリカ社会との間で信頼関係を崩壊させた原因となっているというものだ。

私たちのインド系アフリカ文化は独特のものである。インド本国の人々はもっと競争的で、鋭く、交渉にも長けている。彼らはそうなるべくしてなった。人口も多いからである。彼らと商売をするとき私たちはひるんでしまう。私たちの社会には彼らに対する不信感が募ってしまう。ほら、「インド本国の人と商談を決めて握手をした後に指を数えなおしたほうがよい」という格言もあるではないか。

こうしたインタビューの証言から私たちが改めて分かることは、第2世代のインド系東アフリカ住民たちは、インド本国のグジャラートに対する認識を著しく変化させている。彼らは海の向こうの社会に対し自分たちとは異なる社会としてのイメージを強くしている。インド本国のグジャラートは、「信用ならない」、「頼りにできない」、「文明化されていない」人々であるのだ。それと同時に東アフリカの彼らはより「西洋化された」生活様式になじんでしまった。彼らが着るネクタイにスーツの衣装や、英語で書かれた契約書、グジャラート語の新聞や雑誌をもはや読めなくなってしまうことなどがそれを物語っている。彼の英語は流暢で、英語で商売契約を結んでいるが、父親に手紙を書くときはたどたどしいグジャラート語しか出てこない。彼と同世代のグジャラート商人たちと同じように、彼も英語交じりのグジャラート語で会話をしている。家では、妻子とグジャラート語を話し、妻もそれにグジャラート語で応じるが子どもたちは英語で返してくる。インドはもはや彼らにとり外国になってしまい、彼らは旅行者としてインドを一度訪れたきり2度と訪問していないのである。

4) インド系移民社会の現状

1980年代以降、対外債務を抱えたケニア、ウガンダ、タンザニアの各政府はいずれも相前後して経済政策の手直しをせまられた。自由主義市場経済の導入である。

ウガンダ政府の方向転換は、1982年に没収財産返還法（Expropriated Properties Act）を公布し、アミン大統領の時代に没収したインド系資産の返還を始めたことに象徴される。その目的は、インド系追放によって、打撃を受けた経済を、かつての所有者を呼び戻すことによって多少でも再建することにあつた。しかし、欧米での豊かな生活を捨てて、

再び悪夢の経験をさせられたウガンダに戻ろうとするインド系移民の数は多くない。未だに政局が安定していないということもある。必然的に、返還された資産の運用を他人に委ねるか、売却するかを選択肢が残されることになる。そうした資産の売却や管理を引き受ける会社を設立する者もあらわれるようになった。

一方ケニアでは、1980年代初頭から国際通貨基金（IMF）及び世界銀行主導の構造調整プログラムが採用されていたが、1992年に民有化政策を導入し、市場経済化を推進することになった。また、IMF や世銀の指導をかたくなに拒否していたタンザニアでも、ついに1984-5年度には構造調整を受け入れ、経済再建計画の一環として、それまでの国家主導の社会主義的経済政策を廃し、市場経済への転換が行われた。両国では、ともに経営不振に陥っていた準国営企業の民営化が進展し、貿易も大幅に自由化されている。さらに、1991年にインドが経済開放に踏み切ったことや、1994年の南アフリカにおけるアパルトヘイト体制崩壊後の南アフリカ資本の東アフリカへの流入が、このプロセスに拍車をかけた。タンザニアで発行されている1999年8月25日付の『ガーディアン』紙によれば、インドからの輸入は1998年度に1億ドルを超え、インドはタンザニア最大の貿易相手国に浮上した。東アフリカ諸国の経済自由化政策は間違いなくインド系移民社会にとっても経済活動の活性化への契機となった。しかし一方でアフリカ人との貧富の格差が拡大し、その不満の矛先がアジア系移民に向けられるなど穏やかではない状況にあることも確かである。そのなかで、インド系移民社会は現地社会と調和のとれた共存関係を図るための工夫を迫られているといえる。富永と宇佐美は、1990年代末にタンザニア在住のインド系移民を対象に、インド系社会とアフリカ人ホスト社会との相関について、意識調査を中心とした分析を行っている。

5) インド系移民の文化的維持度と社会的共存度の分析

富永と宇佐美の分析はまず、枠組みとして、(a) アフリカ人社会との共存度と、(b) インド文化の維持度を取り上げ、この両者の相関関係から、インド人が組織している諸集団をアフリカ人社会に位置づけている。この2つの分析枠組みを検証するための指標としてそれぞれについて以下の4点を設定した。

(a) アフリカ人社会との共存度

①国籍、②永住の可能性、③政治的関心、④施設の開放性

(b) インド文化の維持度

①言語、②宗教、③インドとの交流、④衣・食文化

上記 (a) と (b) の相関関係から、以下のような4つのモデルを引き出すことができるとした。

A) インド文化の維持度が高く、アフリカ社会との共存度も高い集団

B) インド文化の維持度が高く、アフリカ社会との共存度が低い集団

C) インド文化の維持度が低く、アフリカ社会との共存度が高い集団

D) インド文化の維持度が低く、アフリカ社会との共存度も低い集団

以上の4つのタイプを、インド文化とアフリカ人社会との関係に注目して類型化すると、Aは接合タイプで多文化型、Bは分離タイプで複合文化型、Cは同化タイプの単一文化型、Dは周縁タイプのコスモポリタン型として設定した。

分析対象として、ダルエスサラームのインド系移民を取りあげ、ヒンドゥー教徒(6,628人)、シク教徒(300人)、ジャイナ教徒(530人)、キリスト教徒(650人)、スンナ派ムスリム(5,000人)、およびシーア派ムスリムのイスマーイリー(3,500人)、イスナーシャリー(8,000人)、ポーホラー(3,035人)の各集団を取り上げている(カッコ内は、各集団の聞き取り調査によって知ることのできた1998-99年度の人口とする)。このうち、ヒンドゥー教徒に関しては、上層(商人層で自営業者が多い)と下層(職人層が多い)にわけて考察している。上層は相対的に富裕層の者が多く、下層はそうでもないが両者の格差はインド本国においてみられるそれと比較するとそれほど大きくない。

表3、表4は上記の分析枠組みにそってダルエスサラームに居住するインド系移民を相対的ポイントにより評価したものである。

表3 インド系移民のアフリカ人と共存度(富永 & 宇佐美 2000:107)

	ヒンドゥー教徒		ムスリム				ジャイナ教徒	シク教徒	キリスト教徒
	上層	下層	シーア派			スンナ派			
			イスナーシャリー	ポーホラー	イスマーイリー				
タンザニア国籍保持度	2	3	2	2	2	3	2	1	2
永住可能性	2	3	3	3	1	3	3	1	1
政治参加度	1	1	2	2	2	3	1	1	1
施設の開放度	3	3	3	1	3	3	1	1	1
計	8	10	10	8	8	12	7	4	5

表4 インド系移民のインド文化の維持度(富永 & 宇佐美 2000:108)

	ヒンドゥー教徒		ムスリム				ジャイナ教徒	シク教徒	キリスト教徒
	上層	下層	シーア派			スンナ派			
			イスナーシャリー	ポーホラー	イスマーイリー				
言語	3	3	3	3	3	2	3	3	1
宗教	3	3	2	2	2	1	3	3	1
内婚	3	2	1	2	1	1	3	3	2
衣・食	3	3	3	3	1	3	3	3	1
計	12	11	9	10	7	7	12	12	5

しかし、オオノクのインタビューに基づいたヒンドゥー系グジャラートたちの今日的認識を思い起こすと、東アフリカに移住してきたインドのグジャラート出身のヒンドゥー系ロハナーの人々の事例を見る限りでは、インド本国は確かに初期のころは交易商人たちの経済活動や移民たちの社会的関係の拠り所として重要な地位を占めていたものの、時代とともにそのネットワークは他の方向へと展開し、インド本国の位置づけは、大きく変化してしまっただけでなく、母なる故郷から、全く異なる外国へと変化してしまっただけである。それゆえ、彼らは文化的アイデンティティを保ちながらも、既にインド本国との経済的・社会的きずなは希薄化しているがゆえに、東アフリカ社会における文化的社会的基盤をむしろ積極的に築こうとしていると見ることもできるのである。富永と宇佐美の分析とオオノクの分析が、概ね同時代の東アフリカに生きる同じインド系移民を対象にしているのであれば、この2つの異なる側面はインド系移民たちの何を物語っているのであろうか。

著者は上記の2つの異なる側面は、同時代的なインド系移民たちの戦略的な生き方を捉えているのだと考えている。東アフリカのインド系を中心とする南アジア系移民のコスモポリタンの生き方とは、自分たちのアイデンティティを維持しながら、しかも現実的には経済活動がうまくゆくように社会的に上手に立ち回ることであると見ているのである。有史以来彼らを受け入れている東アフリカ社会もそうした彼らの経済活動や文化を取り入れながら、スワヒリ語という新しい言葉の体系を作り、独自の海上交易文化圏を築き上げてきた。「ハランバー」という言葉に裏うちされた人間の連帯感や相互扶助の精神は、文化や言葉そして人種の壁を越えて展開されてきたコスモポリタンの東アフリカ市民の歴史に反映された根強い考え方である気がしてならない。インド系移民も、アフリカ系現地人たちも、表面では対立しながら競争社会の中で必死に生き延びる生活を強いられるが、潜在的には東アフリカ市民として共存共生を目指す方向を望んでいるのではないかという、やや楽観的な観測をしても面白いのではないだろうか。

参考文献

- 1) Eliot, Charles, 1966[1905], *The East African Protectorate*, London
- 2) Gregory, Robert G. 1993, *South Asians in East Africa : An Economic and Social History, 1890-1980*, Westview Press, Boulder.
- 3) Hollingsworth, L. W. 1960, *The Asians of East Africa*, London.
- 4) Kristiansen, Stein & Ryen, Anne, 2002, "Enacting their Business Environments: Asian Entrepreneurs in East Africa", *African and Asian Studies*, vol. 1, no. 3, pp. 165-186.
- 5) Mangat, J. S. 1969, *A History of the Asians in East Africa, c. 1886-1945*, Oxford.
- 6) Onok, Gijsbert, 2004a "The changing culture of the Hindu Lohana community in East Africa", *Contemporary South Asia* 13(1), pp. 7-23.
- 7) Onok, Gijsbert, 2004b "After Shaking his hand, start counting your fingers. Trust and Images in Indian business networks, East Africa 1900-2000", *Itinerio* 18(3), pp. 70-88.
- 8) Onok, Gijsbert, 2006 "South Asians in East Africa (1880) with a Particular Focus on Zanzibar: Toward a Historical Explanation of Economic Success of a Middlemen

Minority”, *African and Asian Studies*, vol. 5, no. 1, pp. 57-89.

- 9) Patel, Hasu H. 1973/74 “Indians in Uganda and Rhodesia : Some comparative perspectives on a minority in Africa”, *Studies in Race and Nations*, Vol. 5, No. 1, University of Denver.
- 10) Salvadori, Cynthia, 1989, *Through Open Doors : A view of Asian cultures in Kenya*, Nairobi, 2nd ed.
- 11) Tilbe, Douglas, 1972, *The Ugandan Crisis*, Community and Race Relations Unit of the British Council of Churches, London.
- 12) 富永智津子&宇佐美久美子, 2000 「東アフリカのインド人」、『移民から市民へ：世界のインド系コミュニティ』東京：東京大学出版会、pp. 72-113.

-
- i 現在のインドでは、ヒンドゥー教徒はカースト間の移動は禁じられており、結婚も同一カーストの中で行うことが原則とされている。異カースト同士の結婚は都市部などの富裕層で見られるようになったが、一般的ではない。
 - ii フンディあるいはハワラと呼ばれる、インフォーマルな価値交換システムのことを指す。巨大な交換ネットワークを抱えるブローカーにより、金融システムと同じ機能を果たす。中東、北および北東アフリカそして南アジアで現在も機能している。
 - iii ハリー・ツク (Harry Thuku : 1895-1970) は、ケニアのギクユ出身の運動家。ホワイト・ハイランドが形成されて、多くの土地を失った人々のひとり。東アフリカ協会を作り、反植民地運動の指導者として活躍した。